

学 位 論 文 要 旨

氏 名 荒金 誠

題 目 **フランクलにおけるロゴセラピーの形成**
— 第二次世界大戦前の思想と実践に着目して —

本論文の目的は、第二次世界大戦前のフランクルの思想と実践に着目して、ロゴセラピー形成のプロセスを解明することである。

第一章 力動性心理学の受容とその批判的継承

フランクルの生涯は、その青少年期から、「人生の意味と価値」を求めての探究の歩みであった。その関心からフランクルは、フロイトの精神分析、アドラーの個人心理学に接近していくが、両者は「心理学主義」に陥っていると見なし、彼の内的希求が満たされることなく彼等から離れていく。フランクルの離脱の背景には、アラースとシュヴァルツ、そしてシェーラーの思想的影響があり、フランクルは従来 of 心理学の限界を乗り越えるために、哲学的思索から得た知見を心理学に導入する必要性を認識し始める。

第二章 シェーラーからの思想的影響

フランクルは、フロイトから離れアドラーとの緊張関係にあるとき、シェーラーの書物『倫理学における形式主義』に出会い、シェーラーの思想に傾倒していく。ロゴスと実存に方向づけられ人間の全体像を包括する人間観に依拠する心理療法を模索していたフランクルは、シェーラーを通して、心理身体的なものに対する「精神 (Geist)」の優位性を承認する人間学が、心理療法の基盤とならなければならないことを認識する。

第三章 青少年相談所の設立とその活動

フランクルは、困窮の中にいた当時のウィーンの青少年に対して深い憂慮を抱き、若者のための無料の相談所の必要性を訴え、ついには自らがイニシアチブをとって青少年相談所を創設した。その青少年相談所において、フランクルは苦悩する青少年に対して自ら相談助言活動に携わることにより実践を積み重ね、その経験の蓄積から従来 of 心理療法の問題性を把握し、その枠組を越え出る新しい心理療法の構想に関心が深まっていく。

第四章 ロゴセラピーの構想

困窮にある青少年の真の救済の道を模索したフランクルは、人間の中の最終的な「態度決定」と「決断の自由の可能性」に目を向ける。そこから、生を充足させるべき責任性へ

の、態度決定の可能性を核とする人間理解が、フランクフルトの中に育まれていく。困窮している人間を精神的な苦境の中において見、より真実な人間像からスタートする心理療法を希求したフランクフルトは、これまでの心理療法に、シェーラーの哲学的人間学から示唆を得て、「意味と価値」という倫理的関心の問題を導入しようと試みる。人間の中における「精神 (Geist)」の自律性と優位性を承認し、人間存在の全体性を身体的・心理的・精神的な統一体として把握し、それを自らの実践に生かそうと試みる。フランクフルトが、これまでの心理療法の規範的な硬直した一面性を越え出て、人間存在の全体性を、心的に病む人間の全体像の中で柔軟に把握することを目指したとき、「ロゴセラピー」の構想が形成された。

第五章 ロゴセラピーの人間観

ロゴセラピーは、人間の実存の本質を自由性と責任性にあると考えて、そのことを心理療法の中核に据えることを要請する。ロゴセラピーは、その自由と責任性の根源的な「場」である「精神 (Geist)」の次元への洞察を、心理療法において理論的に結実させたものである。「精神 (Geist)」は観念的なものではなく、フランクフルトが真剣に対峙した青少年や患者の最深の内的な「根源的な苦悩」の救済の道を探求していく中で辿り着いた、「ロゴセラピー」の構想の契機となるフランクフルトの人間理解の核心である。それは、「心 (Seele)」に対して「精神 (Geist)」の優位性を主張し、その「自己距離化」と「自己超越」の能力に基づいて、環境世界と自己に対して、「イエス」か「ノー」のいずれかを選択することのできる自由な「態度決定」の究極的な基盤である。

本研究の主たる意義は、以下のように考えられる。

一つ目は、ロゴセラピーの構想の大枠は既に第二次世界大戦前になされていたと考えて、「強制収容所体験前のロゴセラピー形成過程」を追究したことである。殊に、これまでの研究では光が当てられていなかったフランクフルトの実践の「青少年相談所の創設とそこでの活動」を、フランクフルトの原資料に基づいて解明したことと、ロゴセラピーの構想過程において、シェーラーの哲学的人間学からの示唆によって成し遂げた、フランクフルトの「理論と実践の融合」を、フランクフルトの人間観の変容を探ることにより明らかにしたことである。

二つ目は、ロゴセラピーの思想から汲み取ることのできる、学校教育への示唆の探究を深めたことである。ロゴセラピーの基盤にある人間観と提示している治療の方向性は、教師の教育活動と教育のあり方に対して重要な提言をしていることが考察できた。すなわち、被教育者が自身の唯一性と一回性において「生きる意味」を見出し、自らの責任と決断において実現していくことのできる力、視界を広げ自らの良心に耳を傾けることのできる力を磨くことを教育の使命と捉え、教師はその理念を自らの教育実践において具現化していくことが要請されている。